

第2回 香美市立図書館及び美術館収蔵庫建設等検討委員会

平成28年7月29日（金）18：30～

市役所3階会議室

出席委員：中村直人委員長・濱田正彦副委員長・内田純一委員・大岸真弓委員・
岡花瞳委員・岡林良浩委員・田中信一委員・野村貴子委員・野村文紀委員・
濱田久美子委員・町田由岐子委員・森本ちづ委員・山重壮一委員・
山本祥子委員・依光美代子委員（15名）

事務局：教育長・次長・課長・班長・都築館長・松岡・佐竹館長・黒岩・依光

日建設計：森・服部

教育長：あいさつ

（委員長）

今日は図書館の基本コンセプトを練り直したいと思います。

新図書館に向けての懇談会が行われ参加者39名とあるが、情報をいただきたい。

（事務局）

小学生と高校生が10人ぐらい。後は大人。大学生はいなかった。

（委員長）

「そうだ 図書館にいこう」は子ども会議が出した文書だが、これはいつ出された文書か。

（事務局）

6月中ぐらいに各小中学校でアンケートを子ども会議が中心にとったものを集約し出した。

（委員長）

いつ出たかはすごく重要。誰が言ったか、また、これを我々が扱うかということ。資料の「1.基本方針」について説明を。

（館長）

基本方針・基本理念をつくっている。「香美市の宝をはぐくむ文化の拠点」と書いているが、このコンセプトの理念は基本方針の全体を表すので、みなさんに考えていただきたい。

(委員長)

2の基本理念と書いてあるが、香美市立図書館の概念をつくりたいということか。こういう図書館を目指したいというところの香美市の特徴を踏まえて、特にこんな市だからこういうふうな方向性をというところをまとめていくことになる。

(委員)

これを実現するなら所蔵冊数とかスペースとかスタッフの数が足りない。所蔵がせめて10万冊はないと。1500㎡なら工夫すれば10万冊は入れられないことはない。中の面積の割り振りを見直さないといけない。開館時間は遅くてもかまわないので、平日普通の人に来られるようにして、本のバラエティ（多様性）を増やす、例えば蔵書構成、一般の成人の図書が4、5万冊は必要。

(委員長)

全部機能させることを市民の方が求めるのなら、市民がやらなければならないことが多くなる。スタッフをどう充実させるか、工夫の余地がある。

(委員)

業務の基本方針を考えると、上位法の図書館法が基本になるかと思うが、今、示されている方針と概念、理念とかいうものは、合致しているか。

(委員)

図書館法自体が古い法律で、文化の発展に寄与するという抽象的な書き方。意識するならば、文部科学省で図書館の設置および運営上の望ましい基準をつくっているのをベースにした方がよいと思う。

(委員長)

法律を超えてもっと市民のために長期的に使えるコンセプトを考えなければならないと思う。香美市の文化的特性をどうみるか、幼稚園や障害者施設、大学、大学院まで持っていて、頑張ろうと思うと博士になれるという機能を持っている。工科大は高機能で拡大しているので、市民の要望に応えられる。二町と一村が合併してできた香美市にふさわしい構図にするにはどう持って行くのかを考えないといけない。旧町村が合併しただけでそれぞれの固まりがバラバラのままにあるというのが一番よろしくない、それを壊すコンセプトで、ひとつになる概念みたいなのが出ると非常にいい、時間が短いのでコンセプトの中身を深めていければ良いと思う。

(委員長)

図書館の収蔵の件で山重さんに伺いたい。収蔵の仕方によって狭い図書館でも上の方まで収蔵できる高性能なシステムが設置できると聞いたが。

(委員)

グルグル回してコンパクトにできる集密書庫もある。電動じゃなく手回しもあるので書庫にも入れることを前提にした上でやれば1500㎡あれば10万冊は入れられる。新書や文庫は、小さいサイズで一番読みやすい本だから、全部買っていいと思う。値段も安い。選書自体、工夫を行えば可能になる。

(委員)

香美市の図書館らしさがどこにあるのか、分かりづらい部分がある。香美市の図書館としてここを重要にしたい。ここを他と違うところにしたみたいところがコンセプトになっていくと思う。

(委員)

私は子どもの立場で、「そうだ図書館に行こう」という言葉が気に入っている。例えば、ディズニーランドやUSJは、また行きたい。行ったらなにか新しいことに会えるかもしれないという、そういう何度も何度もそこへ行くということがすごい魅力だと思うので、拠点としての図書館に行きたいと思えること、僕らが考えた案があの図書館になっていると思ったら、すごい思い入れがあるのかと思う。

(委員)

この基本方針、理念。香美市でなくて別の市町村の名前を入れても十分どこでも通用するような、香美市らしさが本当に何も無い。ここは議論の必要があったと思った。

(教育長)

香美市内の広い土地を10ぐらい洗い出して用地の検討委員会を開いていただき、いろんなことを検討して最終3つの候補地に絞っている。

(委員長)

教育基本計画には『知の拠点』であるという概念が出ている。幼稚園、保育園から障害者の教育施設、大学、大学院まで持っている特性があるので、全部生かせるように、生涯教育を達成するため図書館がその役割を果たせるように、言葉をうまく使っていけたら。

100年後ぐらいの市民が改良して使えるっていう概念が必要かと思っている。

(副委員長)

図書館は配架スペースと閲覧他のスペースが基本になってできている、例えば閉架図書と開架図書の部分でどういった見せ方をするか。今は1m50 cmとか30 cmとか子どもとかお年寄りに合わせた本棚で、車椅子が通れる形で、どうしてもスペースが必要になる。その中で香美市らしさを表現できたらいいと思う。

(委員)

蔵書数も今の案では8万冊で少ないと思った。でもスペースは1500㎡でいろんな人の意見を見たら、子どものことをたくさん書いているので、香美市は子どもの事を盛り上げていきたい、そこが重点的施策になってくるのじゃないか、目玉になってくるのかと思った。

私の中では4つあって、子ども、シニア世代、香美市はたくさん文化的なものがあるので郷土資料、ネットワーク、みなさんはいかががでしょうか。

(委員長)

前回、子どもを中心に議論をしてきたところもあるので、今言われた提案は確かにそのとおりです。

(委員)

香美市の人口構成を見ると、大学があるからか意外と若い人の人口が多い。それは特徴だと思う。高知県内の他の市町村で、若い人をそんなに意識するのはやりにくい感じがするが、香美市ならできるのではという気がする。保育園から大学院までいける、というところは生かした方がいい、それが香美市らしさと感じる。

(委員長)

人口構成上で言うと厳しい状態、高知県全体も香美市も、大学作った当時から4千人ぐらい人口減っている、それを打開できるようなコンセプトが入るといいと考える。

(委員)

知の拠点というのはそのとおりだ。大学がある町、高知市以外では香美市だけで、すごく大きな売り、もう1つは文化。香美市ぐらい文化のある市はない。例えば美術館がある。高知県内で、自分のところで持っている美術館は他にない。他にもすごく有名ないざなぎ流があり、アンパンマンも含めて漫画家も多い。香美市が人を呼ぶというか、文化人の拠点のような、将来文化についても他の市町村を圧倒するような、そういう町になってもらいたいと思っている。知の拠点と文化の両方、欲張り過ぎなのかもしれないが香美市の特徴じゃないかと思う。

(委員)

今、人口減少とあったが、香美市の市街化区域の中は人口が毎年増えている。歴史的な史跡や城跡などもあるので、そのへんを生かしたいと思う。

(委員)

財政的に、すべてを平均的に充実させるのが無理であれば、何かに特化した、香美市の図書館に行けば他の図書館にないものがあるというものに特化した方が、いいのではないか。保育園から絵本が大量にいると言われるが、ホントにいるのかと思う。単価が高いし、同じ本ばかり読み聞かせている、小さい子どもさんが使うので傷みが早い、定住の面からも、特化するのであれば子ども向けのスペースであるとか、書籍とかに力を入れるのがひとつのイメージではないか。不登校の生徒も全国的に増えている。フェイスブックでも学校には行けてないけど、図書館には居場所があるんだよと、という内容を発信されていた図書館もあった。そういった居場所づくりもあれば良いと思う。

(委員)

伊万里の図書館を見学し、図書館の概念が変わった。一番印象に残ったのが、図書館に市民の方が非常にいきいきと関わっている。市民が作り上げ、図書館ができた後も運営にずっと関わっているという図書館だった。

(委員)

振興基本計画の時に香美市の宝は、豊かな自然、文化、温かい人々というようなキーワードがいっぱい出てきて、子どもを中心に若い人を中心に考えていただくのはすごいいいなと思う。

(委員)

親子で行けて、くつろげる図書館ということで大人と子どものコーナーを分けて、アットホームな図書館というのはすごく大事じゃないかと思う。香美市を背負っていく子ども、若い世代の方が図書館にたくさん来る図書館になったら良いと思う。

(委員)

香美市の特性を生かすためには、物部に居ても香北に居ても香美市の図書館という気持ちで市民に湧くようなものをつくってほしい。今だったらたぶん山田の図書館という感じにしか受け取れない、そのあたりを考えていくことが大事だと思う。

(委員長)

山田の地区に作ってもインターネットや、その他の機能を高機能にして、香北分館や物

部分館で本を借りたり、やりとりをしたり、e-ブック等直接借りられる機能をつけて、どこにいても同じように一定利用できるんだということを市民の方に分かっていただかなくてはならない。市街地の中心部は増えても周辺は減って、全体としては減っている。定住したいと思える市にならないといけない。遠隔地に住んでも一定利用ができると市民の方に理解できる機能をつけていきたい。

(委員)

ユニバーサルデザインとか福祉、子ども、お母さん方に優しい町づくりをするのに、狭い敷地に何層かにわけて建てる図書館よりは、平屋のようなフラットなところでゆったりというのが理想だと思う。いくつか絞った方がいいと考えた時に、ロングスパンで考えて、本の部分、知の部分プラスアルファ、物づくりか町づくりに関わるところをプラスして、また建物の構成としたら大きなものの集合ではなく、独立したものが少しずつ増殖していくようなイメージを考えて、成長する図書館、施設、が良いではないかと思った。大きなものを建てて50年後100年後を見据えるのは、非常に難しい。

(委員)

成長する図書館というのは、可能か。

(委員)

可能です。アメリカの図書館建築にモジュールが流行したときがあって、単位があってそれを繋げていくというのを徹底的にやった人はいた。今、全国的に流行っているのは管理のしやすさから大きなワンフロアが多い。たくさん小部屋を作ると管理する人が必要になる、誰もいない部屋がたくさんあると安全面の心配がある。

(委員)

子どもは成長していくので、子どもと大人が共存できるものが良い。ディズニーランドも次々新しいアトラクションができてリピーターができる工夫を行い、改善している。

本も電子化等、すごい勢いで時代が変わっている。

(委員)

レイアウトが一切変えられない図書館は困る。少なくとも50年は使うので、変えなくなったらレイアウトは変えられる図書館であるのは大きな条件。書庫を増築したい時に図書館が四角い建物だとしたら、せめて一面ぐらいいは増築できる面が空いているのが理想的です。成長する図書館という話は、元は大学図書館の館長が本が増えるから書庫がつかれない設計は困るという話から始まって、それをいろんな分野に応用しているが、空間的なことというレイアウトが変更可能、できれば増築したければある程度はできる要素が必要

である。

(委員長)

成長するという概念でいえば、まったくその余地がないのはなかなか厳しい面があると思う。香美市の特性で教育とか文化で一定、高知市を除けば、知の中心地としての役割を果たしてきたところがあるので、その特性をどういうふうに生かしたところをつくるかが必要であると思う。

あと人口の問題も考えて、保護者がここに住み続けたいと思うような概念を入れられない、香北や物部との高機能で情報ハイウェイ化と言ってもいいシステムが必要だと思う。情報の革新は凄まじいものがあって、現在無いようなシステムで図書館機能が更新されると思う。特にそこについて高度な学習をしたいと思えるような知的な出会いがないとだめで、その高機能化とは市民が係わってやるべきで、自分たちが汗をかいて知恵を出すことになる。そうじゃない図書館つくるなら本当に意味がないと思う。

(委員)

今、知的な出会いという話がでたが、それができる機能がハード面だけではなくて職員、専門性のある人がいるところも特徴に出しておきたい。市民が運営してもかまわないが、持続的に質の高いサービスを提供できる職員がいることが大切である。

図書館の人がやっているから私には関係ない、とか敷居が高いイメージで利用者が固定してしまうところがある。どれだけ図書館が身近で自分のことと思えるかというところがサービスに関連してくると思う。

(委員)

本当にレファレンスサービスが重要だと思う、司書が少ないし、時間を長くすると早出と遅出があり、対応が大変になる。県の新図書館とも連携がとれて、来館者の質問にすぐ答えられる関係づくりができていれば、小学生が中学生、高校生、大学生になったときも図書館に行ったらなんでも答えてくれるという図書館になれると思う。

(委員長)

少ない職員ですべてを機能させるのは難しいと思う。司書がレベルを上げて、専門家の方が図書館を運営するのはすごく重要なことで、そこは高機能にさせていただいて、研修の機会も自由に与えてさせていただいて、職員の能力を成長していくような機能にさせていただければと思う。

(教育長)

香美市は、障害ある方がいろんなところで頑張って住んでいる町で、そういう方々が図

書館をひとつの活動、集まりの場所にできたらいいと思う。本を揃えるのも必要ですが。

(委員)

香美市の障害者福祉施設の方々がひとつのものを経営するとか、本を返すとかの図書館の中で少し軽い作業ができたり、決められたことをやっていただくことは可能だと思う。そういう協働作業ができたらいいと思う。

(副委員長)

図書館は情報を取りに来る場所というだけではなく、多様な人間があつまってきて居場所というか、交流を広げるようなスペースをなんとか確保してほしいと思う。文化的なことを味わえる時間が仕事以外にできるという部分も考えていただきたいという希望です。

(委員長)

本を探したりアクセスするまでのコンシェルジュのような機能がついていると自ら学ぼうかなと思えるような図書館になってくれるといいかなと思う。

(委員)

私たちは何か読みたいと思っても、ピンポイントでタイトルが分かるわけではないので、最初の取っ掛かりで分野とかで選べて、本のリストとか出たりしたら、探し出すことができる、高齢者の方でも健康に関する本というのを選んだら健康に関する本のリストが出るというシステムがあるとすごくいいと思う。

(委員)

高知県が一番弱いところは、圧倒的に本が少なく情報が少ないので、普通知られているようなことを知らない。基本的なところを市町村の図書館が提供して、子どもや青少年に本を読めと言わずに、まず自分で読んでいる姿を見せると、自然な人間のやり方なんだなと思って読むようになる。情報システムなどを工夫して新しい香美市の図書館をつくったら、県立図書館の検索システムと連動させて、まずは香美市立図書館の本を検索して、ない場合には県立図書館の本を検索して、協力貸出で借りられるということを作ってくれば、かなり利用されると思う。ここの図書館だけで解決して考えずに県立図書館とかが背後にあるってことも含めて考えれば、あまり狭い枠内で考える必要もないと思う。大学の図書館もつけて、高知工科大学と県立両方できるリソースがあるのではと考える。

(委員長)

それでは、7時閉館では、早すぎる。

(委員)

ただし、7時以降あんまり来ないとなると大変なんです。

(委員長)

障害者の方が図書館で働ける部分、カフェの話とか出ていたが、その他にご意見とか情報があれば、出してください。

(委員)

伊万里の図書館やソーレでもやっている方法は、注文を聞いてくるだけとか、運ぶだけだったらできるとかいう形で職員を配置されており、障害のある方たちが働いている形です。

(教育長)

障害がある方とか分けて考えるのではなく誰でも楽しめるということで、例えば字だけで読むのは苦手だけど音だったらいいとか、映像とか、休みの日に町をいろんな人が動いているから、図書館も一つの場所にして、そこで何か使ってできるということがいっぱいあるのではないかと思った。

(委員)

それこそユニバーサルデザインだと思う。障害者だけにするとかではなくて、障害者も含めて子どもたちも市民のかたも、いろんな人が使えるそういうスペースなら、僕は十分作れるのではないかと思う。

基本方針があって、基本理念がある。絶対的にどうこうではなく、僕の感覚として理念がまずある。たとえば学校でいえば校訓ですよ、それを土台にしていくなかで教育目標がありいろんなものが出てくるわけで、最初に基本方針を長々と書くのではなく、香美市のこういうものにしたいというコンパクトな理念的なものがあって、それを具体的に少しずつしていくという流れの方が分かりやすいと思う。香美市の宝はひとつじゃないと思う。子どもであり、障害者であり、また市・郷土の文化であり、教育文化であり、いろんな宝があると思うので、その宝の中味は理念の下でより具体的にしていくとすれば中味もつながって、だんだん具体的になって、分かりやすくなっていくと思う。

(委員長)

だいぶ時間も経過して、意見も出尽くしてきたと思う。できるだけ早く図書館を作ってあげたいという思いが皆さんあると思うので、それぞれの専門的な立場からこういう意見をここで出していただいて集約していくというのが明確になるように、指示していただけるといいと思う。最後に事務局にお返ししますのでよろしくお願いします。

閉会 (20 : 51)